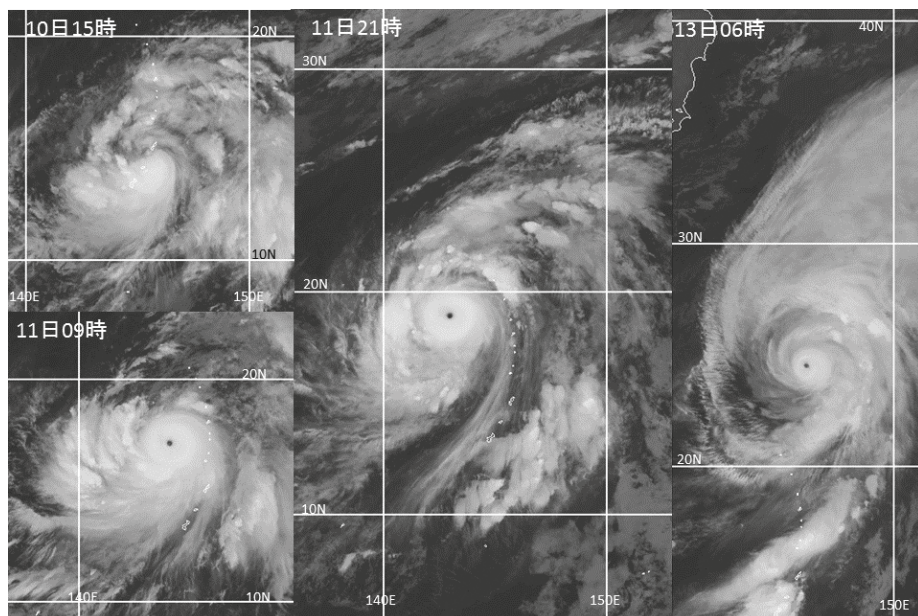


今月のひまわり画像—2023年10月

900hPa まで発達した台風第15号



第1図 2023年10月10日15時～13日06時（日本時間）の台風第15号付近の衛星赤外画像。

2023年10月7日15時（日本時間）に、トラック諸島近海で台風第15号（台風解析はすべて速報値）が発生した。台風は、9日から12日にかけて発達しながら北西進し、11日03時に非常に強い勢力に、同日15時には猛烈な強さとなり、同日21時には最大風速60m/s、中心気圧900hPaまで発達した。

第1図は、10日15時から13日06時までの台風第15号付近の衛星赤外画像である。10日15時には、低気圧性曲率を持ったバンド状の雲域が確認できるが、円形度はあまり良くない状態である（図左上）。この時刻の解析では、最大風速35m/s、中心気圧975hPaであった。その後11日06時には眼が形成され、同日09時には眼が明瞭となり、眼の縁もシャープとなった（図左下）。台風を構成する雲域の円形度も良くなり、最大風速50m/s、中心気圧935hPaまで発達した。台風はさらに発達を続け、同日21時には、最大風速60m/s、中心気圧900hPaとなった。衛星画像からも、中心付近の発達した円形度の高い雲域や明瞭な眼を維持している（図

中央）。次第に中心付近の雲域はやや小さくなるが、13日06時まで眼は明瞭な状態で、勢力も最大風速60m/s、中心気圧900hPaを維持した（図右）。中心気圧900hPaは今年発生した台風の中で、台風第2号と並ぶ、最も低い値である。また、900hPaになるまでの24時間で中心気圧が70hPa低下する急発達をした特異な台風でもあった。台風が進んだマリアナ諸島から小笠原近海では、北緯25度付近まで海面水温29℃以上の海域が広がっており、海面水温が高く、また台風が順調に移動したことも発達に寄与したと考えられる。

台風は、14日21時に、同日18時の中心気圧である950hPaのまま、日本のはるか東で温帯低気圧に変わった。14日00時以降、台風の南西象限を中心に発達した雲域が衰弱し左右対称性が崩れ始め、台風から温帯低気圧へと構造は変化した。暴風を伴う状況は変わらないままであった。

（気象庁大気海洋部予報課 河野麻由可）